

医療機関からの円滑な退院は、医療費の適正化だけでなく、医療安全の確保、患者のQOL向上などの観点から注目され、特に医療から介護に移行する際の医介連携が重視されるようになった。心身機能を十分に把握する理学療法士は、昔から退院支援に積極的にかかわり、重要な役割を果たしてきたが、一方では理学療法士の在宅に関する知識不足が指摘されることもあり、その充実は今後の理学療法士の大きな課題である。本特集が理学療法士の退院支援業務を再考する機会になればと考える。

■退院支援を専門とする理学療法士を配置して(金谷さとみ, 他論文)

病院からの在宅復帰は理学療法の最終的な帰結であり、その実現を支援することが理学療法士の見せ場である。当院では退院支援の重要性は認識しつつも動ききれていない理学療法士が多いことがわかり、退院支援を専門とする理学療法士を配置した。患者が在宅でいかに本人らしく生活できるかは、心身機能を把握したくさん話す機会がある理学療法士の力量次第である。退院支援理学療法士の役割は理学療法士の気づきを他職種につなげ、患者の在宅での自立支援に貢献できる理学療法士を育成することである。

■特定機能病院における理学療法士の退院支援(安井 健, 他論文)

特定機能病院がその使命を十分に果たすためには、退院支援の役割は重要である。退院支援への着手は後手にならないことが肝要で、縦割りの医療色が強いなか、診療科や病棟の垣根を越えて早期から患者に継続介入している理学療法士への期待は大きい。フォローエリアが広範囲であるため地域の情報を得るにはハンデがあり、特に在宅のリハビリテーションスタッフとの連携が課題である。

■地域包括ケア病棟における理学療法士の退院支援(稿本宇未, 他論文)

地域包括ケア病棟は年々増加し、地域・病院ごとに患者を地域に帰しその人らしい生活を送ることができるようシステムの構築が進んでいる。高齢者率の増加が顕著な地域における横須賀市立市民病院での地域包括ケア病棟の運営報告をはじめ、地域包括ケア病棟に勤務する理学療法士が退院支援として患者や他職種とかかわり、連携を図っている状況について紹介する。

■回復期リハビリテーション病院における理学療法士の退院支援(井手伸二, 他論文)

回復期リハビリテーション病院における退院支援では地域生活を視野に入れた多職種・専門職のチームでアプローチを行うことが重要になる。専門職チームの一員として、理学療法士は「基本的動作」の改善を図ることにより生活機能を向上させることが大切な役割となる。理学療法士は適切な動作分析のもとにADLなどの活動を病棟や自宅などの生活場面に適応できるように能力の設定を行う必要がある。

■訪問理学療法からみた退院支援—ここに着目！(伊藤卓也論文)

訪問理学療法の立場からみると、病院の退院支援には、さまざまな長所がある。しかしその長所はうまく活かされなかった場合、短所に変わり得る可能性を秘めている。これらの長所に着目し、退院後の生活場面であり、訪問理学療法の実践場面でもある自宅での生活に結びつけていかなければならない。そのためには病院理学療法士と訪問理学療法士が協働して退院支援に取り組んでいくことが大切である。

■外来理学療法からみた退院支援—ここに着目！(清水暁彦論文)

退院支援は現在の医療提供体制にとって必要不可欠である。外来の役割は在宅生活の支援であるが、その役割は対象者が入退院する際の支援に影響する。適切な退院支援により円滑な在宅移行が期待できるが、改善すべき点はいまだ残る。外来に携わる理学療法士の立場から、退院支援について臨床の場面で気づく点および退院支援へのかかわり方について考察する。